

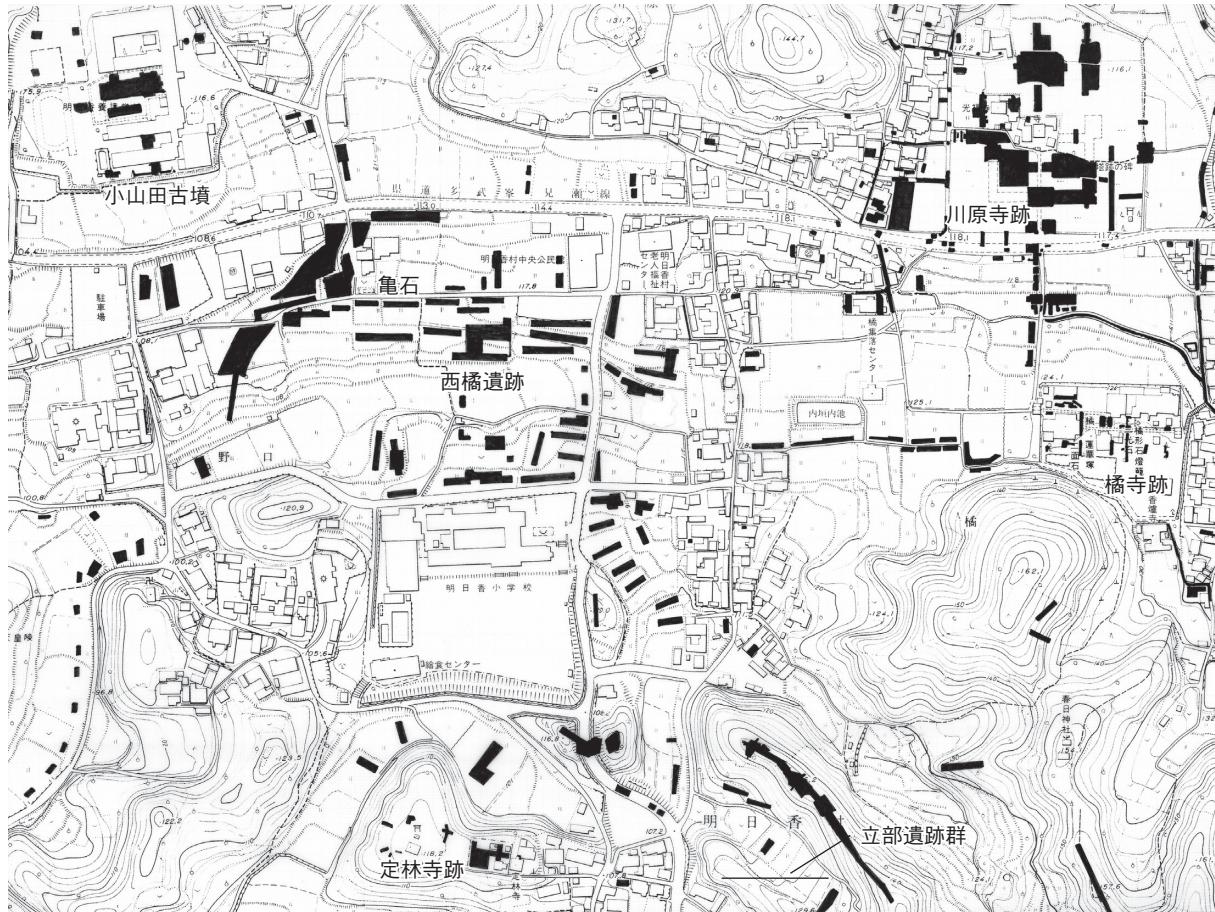
西橘遺跡出土遺物 1

長谷川 透

第1章 はじめに

西橋遺跡は、奈良県高市郡明日香村大字橋 21 番地一帯に広がる遺跡である。遺跡の東側には橋寺旧境内地が広がり、北西には亀石が鎮座する。遺跡の範囲は、南北約 320 m、東西約 370 m である。遺跡の地形は、遺跡中央に西に開く東西方向の谷が延び、この谷を挟んで北と南に丘陵が延びる。

西橋遺跡の発掘調査は、平成3・4・29年度、令和2年度に行われた。なかでも、平成4年度に行われたE4区の調査では、飛鳥時代の土器や木器のほか、当時の飛鳥地域では木簡が一括で出土した初めての事例となった。遺物の内容と性格、その出土量から、明日香村教育委員会は奈良文化財研究所（当時：奈良国立文化財研究所）に協力を求め、遺物整理及び調査研究を実施することとなった。その後、明日香村役場新庁舎の移転先が、同遺跡所在地となったことにより、建設に伴う発掘調査が行われるに至った。これにより、従前に行われた西橋遺跡の整理及び調査研究が再開し、令和5年度末にこれまでの調査成果をまとめた『西橋遺跡発掘調査報告書』（以下『西橋報告書』と略記）を正報告書として刊行した。その後、明日香村内に



第1図 西橘遺跡周辺調査位置図 (1:6000)

ある施設にも西橋遺跡を含む過去の村内発掘で出土した遺物が保管されていることが明らかとなつた^{〔註1〕}。その遺物の多くは既に選別済みであったが、未選別資料のなかには残りの良い資料も見受けられた。このため、報告書刊行後も引き続き西橋遺跡の遺物整理及び調査研究を継続し、その報告を補遺編として『明日香村文化財調査研究紀要』に掲載していくことにした。

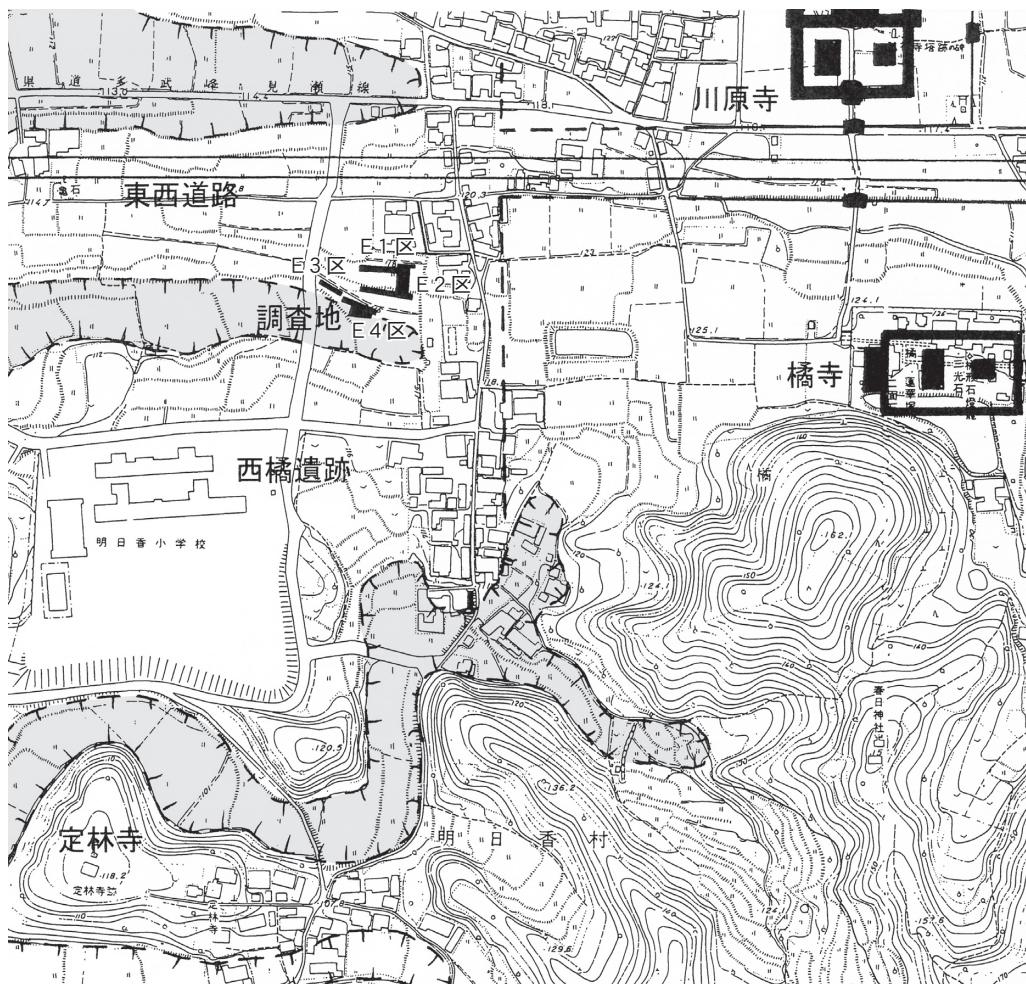
今回の補遺編では、『西橋報告書』刊行後に確認された西橋遺跡出土遺物の内、鉄製品と瓦類^{〔註2〕}を取り上げる。鉄製品は鉄刀子1点、瓦類は軒丸瓦1点、埠3点を報告する。また、軒丸瓦と埠については若干の比較検討を行なつた。

第2章 出土調査区の概要

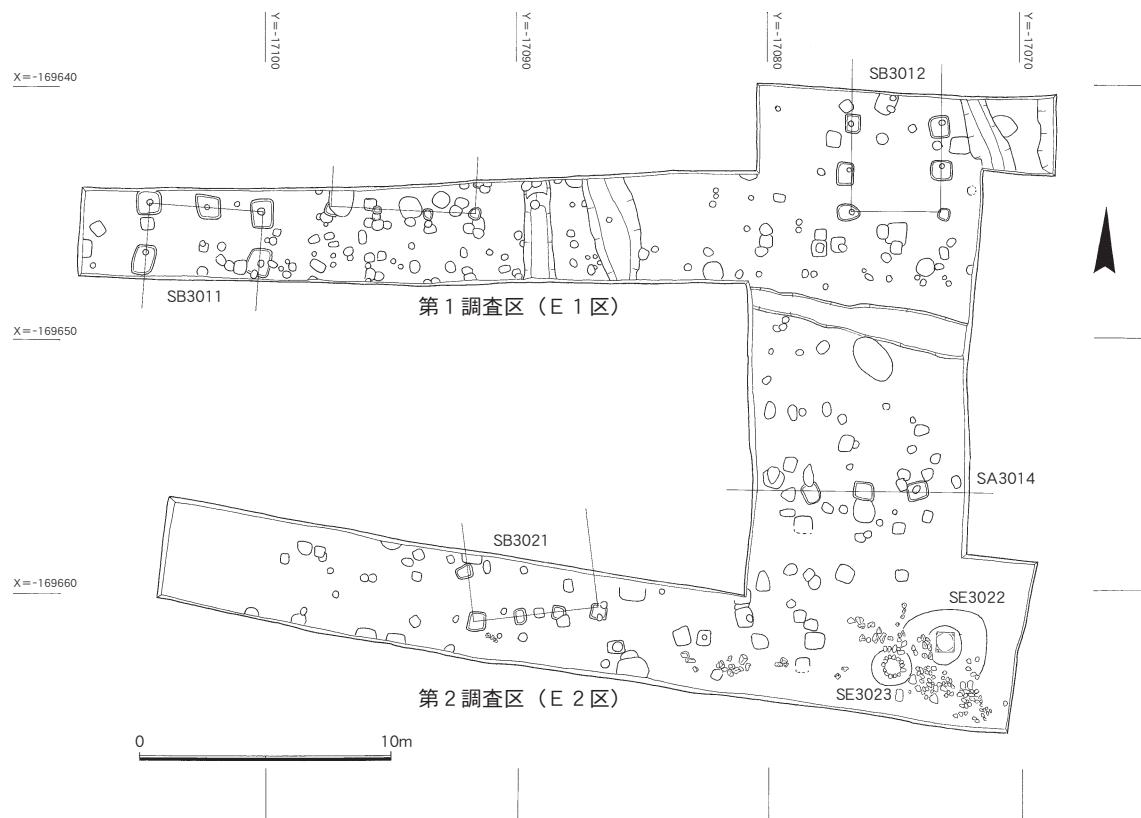
鉄刀子は東地区第2調査区（E 2区）、軒丸瓦と埠は東地区第4調査区（E 4区）から出土した。各調査区の概要は以下の通りである。

東地区第2調査区（E 2区）

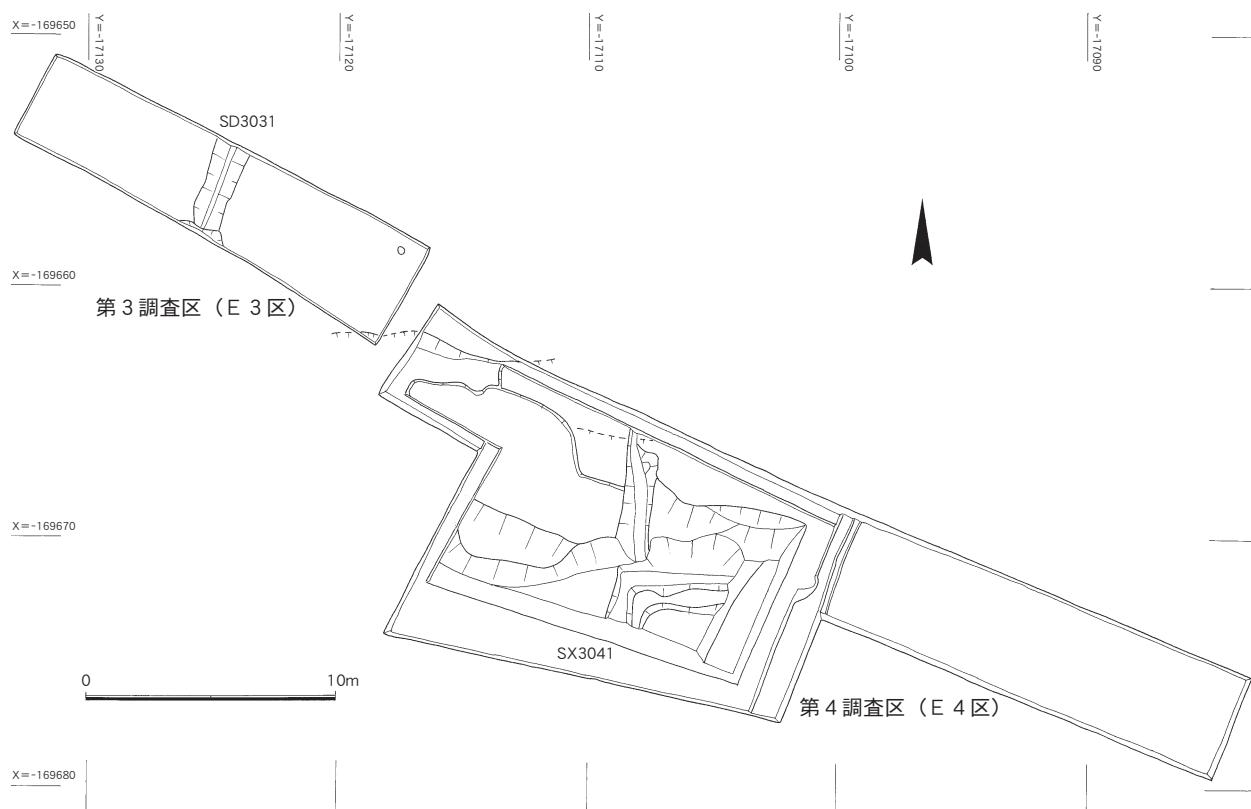
この調査区は、西橋遺跡の東端に位置する。橋寺の推定西面大垣から西に約70m離れており、橋寺の寺域には入らない。調査区は東西に延びる谷筋を挟んで北側にある丘陵の南斜面に位置する。この調査区は谷筋に沿って東西方向に延びる細長い水田に設定された。調査区の北東部には北に延びる拡張区を設け、北側に設定されていた第1調査区（E 1区）と繋がる形となつ



第2図 西橋遺跡 出土調査区位置図（1：5000）



第3図 東地区第2調査区 (E 2区) 遺構平面図 (1 : 300)

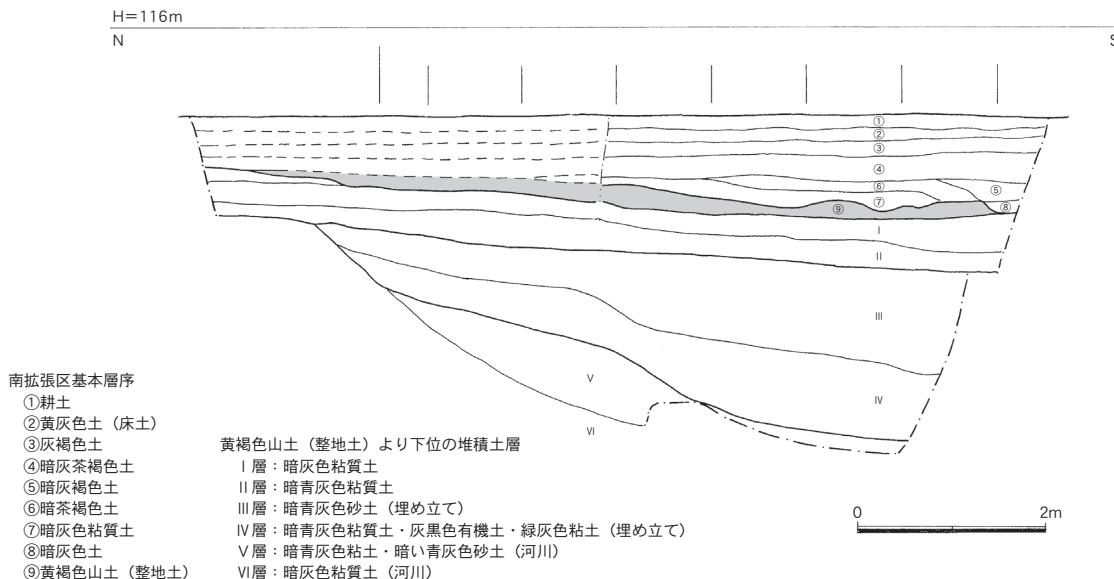


第4図 東地区第4調査区 (E 4区) 遺構平面図 (1 : 300)

ている。表土から掘削して地表下 90 ~ 110cm で遺構面である整地土および地山となる。遺構面では掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、石敷などを検出した。井戸は 2 基検出され、SE 3022 は木組みの井戸、SE 3023 は石組みの井戸で平安時代以降に位置付けられる。井戸 SE 3022 は新旧 2 時期あり、下段が奈良時代、上段が中世に改修された。下段にある井戸枠内の埋土から和同開珎・萬年通宝・刀子が出土した。井戸内出土の和同開珎と萬年通宝については、すでに松村恵司氏により詳細な報告（松村 2005・2007）がなされているが、今回報告する鉄刀子はその共伴遺物である。

東地区第 4 調査区（E 4 区）

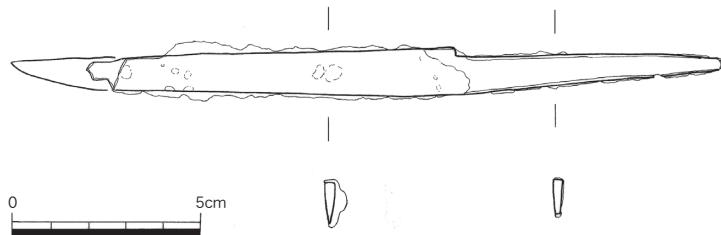
この調査区は、東地区第 2 調査区（E 2 区）の南東にある水田に設定された。橘寺の推定西面大垣から西に約 100m 離れる。E 2 区同様、丘陵の南斜面に位置する。谷筋に沿って調査区を設定し、調査区中央付近には南側に拡張区を設ける。表土から掘削して地表下 50 ~ 80cm で 7 世紀後半の土器を含む整地土となる。整地土上面に遺構はなく、整地土を除去して下層を掘り進めると南に向かって落ちる谷地形（谷 SX 3041）となる。谷 SX 3041 は北側から南の谷に向かって埋め立てられ、この谷の堆積土から多量の土器と木簡とともに木製品、瓦、石材などが出土した。堆積状況と遺物の出土状況から、この谷は極めて短期間に埋め立てられ、その年代観は、土器群が 7 世紀後半（660 ~ 670 年頃）に、木簡群が天武 11 年よりも古ないとされ、天武朝前半あるいはそれ以前の 670 年代前後と位置付けられた。また、木簡群は、寺院に関する木簡のほか官の造営組織との関わりを窺わせるものもあり、これら木簡の由来が位置的に見て橘寺を有力としながらも川原寺も抜きには考えにくいとする。そのため、これらの遺物群は、谷の造成行為に伴って投棄されたもので、橘寺または川原寺、あるいは両寺院に関するものと推定される。



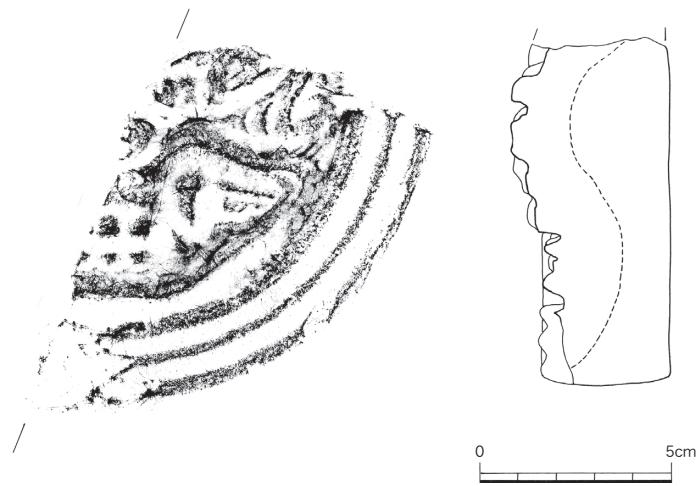
第 5 図 東地区第 4 調査区（E 4 区） 土層断面図（1 : 80）

第 3 章 出土遺物補遺

今回報告する鉄刀子は東地区第 2 調査区（E 2 区）井戸 SE 3022 出土、軒丸瓦は東地区第 4 調査区（E 4 区）青灰色粘質土出土^{〔註 3〕}、博 3 点はいずれも東地区第 4 調査区（E 4 区）谷 SX 3041 出土である。



第6図 鉄刀子実測図（1：2）



第7図 鬼面文軒丸瓦実測・拓影図（1：2）

鉄製品

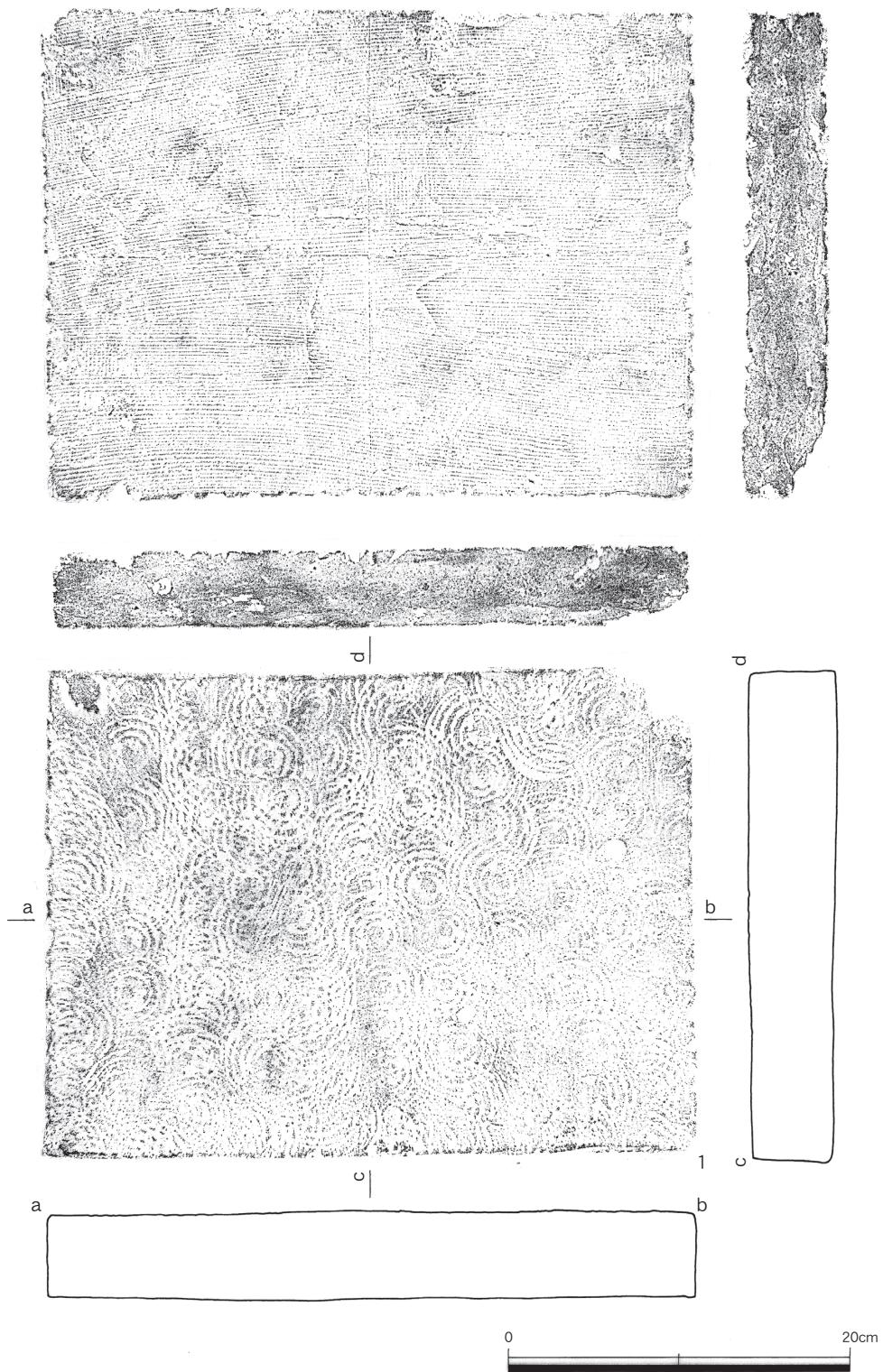
鉄刀子1点である。ほぼ完形で、刃先のみ欠損する。角棟、平造り。棟区が明瞭に残る。全長16.8cm。茎は錆化少なく、茎尻は剣形を呈する。茎長7cm、茎幅0.9cm、茎厚0.1～0.2cm。刃部は錆化著しく、砂粒が多く付着する。刃長は残存部で9.8cm、身元幅1.2cm、身元厚0.2cm。東地区第2調査区（E2区）井戸S E 3022埋土最下層出土。

軒丸瓦

軒丸瓦には、川原寺式軒丸瓦と鬼面文軒丸瓦がある。川原寺式軒丸瓦については、それと思しき軒丸瓦を確認したが、今回は未報告とする^{〔註4〕}。鬼面文軒丸瓦は瓦当部3/4が欠損するが、表面の風化も少なく鬼面はシャープに残る。外縁は三重圏紋で、内区には鬼面の左目から下の鼻頭、眉毛、頬、鼻頭、口唇内には上下に門歯、歯、奥歯がみえる。目は横長の方形でやや釣り目だが、黒目部分は円形に突出する。胎土は精良、径約1mmの石英と黒色粒をわずかに含む。焼成は堅緻。色調は灰色4N～5N。最大厚は4.25cmを測る。東地区第4調査区（E4区）青灰色粘質土出土。

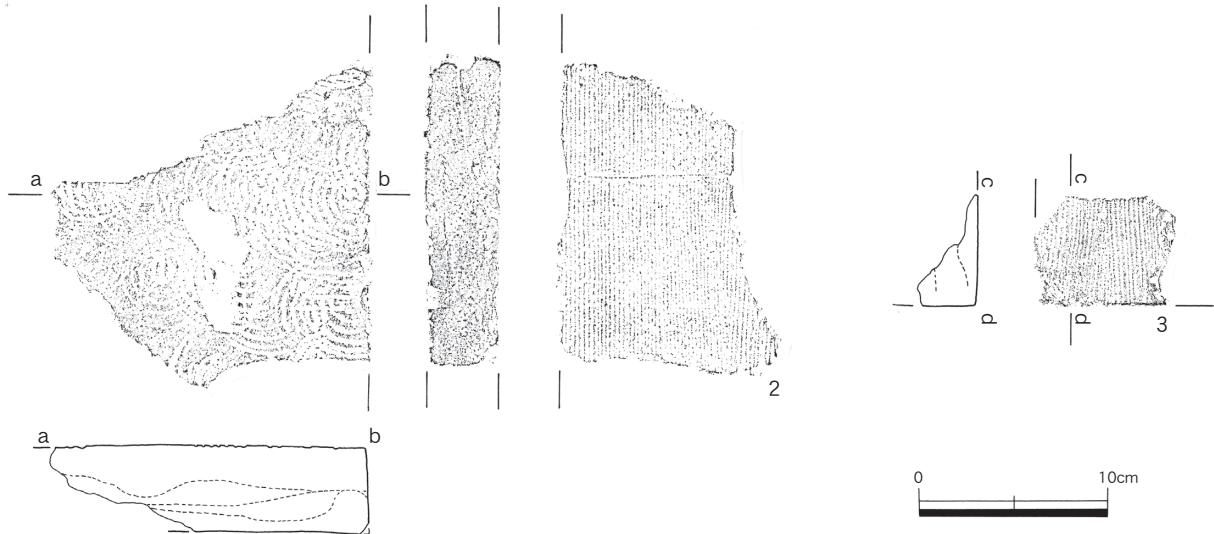
壇

壇は3点あり、1は完形、2・3は端面が残る破片である。壇1は裏面に同心円文の当て具痕、表面には全面力キメ調整が残る。裏面の同心円文は全面に施される。表面には短軸方向の力キメ調整の後、長軸方向の力キメ調整が施され、さらにその上から十字の界線を刻む。界線の深さは7mmあり、鋭利な刃物を使用したことがわかる。十字の界線はフリーハンドによる直



第8図 塚1 (1 : 4)

線であるが、短軸では5mm、長軸では2mmのプレがある。側面はヘラケズリ後ナデ調整。力キメ調整面を上にしたときに側面の上縁に斜め方向の刺突痕跡が複数残る。胎土は径3～5mmの砂粒が少量混じり、径1mmの砂粒と微小な銀雲母を少量含む。焼成は堅緻で、色調は灰白色8N。長辺38.1cm、短辺28.7cm、厚さ5.1cm。東地区第4調査区谷S X 3041 IV層下層出土。



第9図 塚2・3 (1:4)

塚2は破片であるが両面と側面が残る。破面には成形による粘土板の単位が残る。十字界線の深さは4mm。残存率約30%、残存長16.8cm、厚さ4.6cm。胎土は精良だが、径2~4mmの砂粒と少量の石英、銀雲母をわずかに含む。色調は灰白色7N~8N。焼成は堅緻。東地区第4調査区(E4区)谷S X 3041 IV層下層出土。

塚3は片面と側面が残る。表面には力キメ調整が残る。残存する長さ7.5cm、残存幅5.9cm、残存厚3.1cmである。胎土は径1mmの砂粒を少量含み、微細な銀雲母をわずかに含む。色調は灰白色5Y8/2~5Y5/1。焼成は堅緻。東地区第4調査区(E4区)谷S X 3041 III層出土。

第4章 若干の考察

1. 軒丸瓦

鬼面文軒丸瓦

飛鳥時代の鬼面文軒丸瓦は出土例が少ない。奈良県内ではこれまでに葛城市地光寺跡、明日香村大官大寺跡、同村雷丘北方遺跡、同村川原寺跡が確認されており、今回新たに報告した西橘遺跡を加えた計5例となる。これら鬼面文軒丸瓦は、その遺跡でも出土点数が1点と限られているため、軒丸瓦として使用ではなく降棟や隅棟の先端など屋根の要所にのみ使用された可能性が指摘されている [岩戸 2015]。また、鬼面文軒丸瓦の鬼面は、統一新羅の鬼面とよく似ており、統一新羅からの直接的な影響が考えられている。それは、鬼面文軒丸瓦の代表格である地光寺跡が渡来系氏族である忍海氏の氏寺と考えられていること、また、地光寺周辺では鍛冶関連遺構・遺物やミニチュア炊飯具を副葬した古墳などが多く分布し、渡来系氏族の拠点集落とみなされていることなどをそれを補強する。

忍海氏と地光寺

忍海氏は、韓鍛冶や金作などの手工業生産に従事した渡来系氏族として知られ、飛鳥時代には、忍海造小龍の娘で色夫古娘が宮中に入り、天智天皇との間に川嶋皇子をもうけるなど、政

權中枢部との密接な関係を有した。さらに、忍海氏は天武 10 (681) 年と天武 12 (683) に二度の賜姓により姓が「造」から「連」となり、天武 13 (684) 年以降から 7 世紀末までの間には、本拠地に忍海郡が設置されたとみられ、この頃の忍海氏は地盤を固めて最も隆盛を誇っていた。地光寺の建立もまさにこの時期であることが出土瓦からも裏付けられ、東西二つ並ぶ伽藍は、東側（地光寺東遺跡）が薬師寺式伽藍配置、西側（地光寺西遺跡）が四天王寺式と推定され、680 年代以降（7 世紀後半頃）に造られた東伽藍が 8 世紀前半に西伽藍に移動することがわかった〔新庄町 2003〕。ただ、地光寺は忍海氏だけの力で建立されたわけではなく、政權側の思惑として葛城郡を分断するための忍海郡建郡と忍海氏の技術を取り込みたいという意図が働いたのではないかと推測した〔新庄町 2003〕。

鬼面文軒丸瓦二種

奈良県内で確認された鬼面文軒丸瓦は二種類に分類できる。外区の形状と内区にある鬼面の面貌で分類を試みる。外区の形状では、

- ・ A タイプ・・・三重の重弧紋の外縁のみ斜縁に彫り直したもの
- ・ B タイプ・・・三重の重弧紋のもの

に分けることができる。

一方、鬼面の面貌では、

- ・ i タイプ・・・目が三角形の釣り目で、眉間の皺の幅が狭く、口唇の幅が短く牙と奥歯の間隔が狭いもの
- ・ ii タイプ・・・目が横長の方形に角張ったやや釣り目で黒目が円形に突出、口唇の幅が広く、牙と奥歯の間隔が広いもの

に分けることができる。これらの分類で遺跡ごとに整理したものが下の表である。

表 1 奈良県内の鬼面文軒丸瓦分類表

面貌 外区	A タイプ	B タイプ
i タイプ	地光寺跡（天理参考館蔵）	
ii タイプ	地光寺跡（葛木坐火雷神社蔵、橿原考古学研究所附属博物館展示品）	大官大寺跡、雷丘北方遺跡、川原寺跡（保井資料）、西橘遺跡

出土遺跡から大きく葛城地域と飛鳥地域の二種に分けることができる。

先ず、二種の年代観をみてみると、葛城地域にある A i・A ii タイプは 7 世紀後半（680 年代）～8 世紀前半に位置付けられている。一方、飛鳥地域にある B ii タイプの西橘遺跡では、奈良時代の包含層から出土しているため、古い時期の遺物が入っていてもおかしくないが、8 世紀代に破片となって混入したものと考えられる。時期的にみれば、葛城地域出土例がやや先行するようにみえるが、A ii タイプの地光寺跡（葛木坐火雷神社蔵）例と B ii タイプの雷丘北方遺跡は同範であることが確かめられている（花谷 1999）。となると、ii タイプは同範なので大きな時期差を認めにくい。では、i タイプと ii タイプで時期差を認めうるかどうかだが、出土状況や地光寺伽藍での使用状況が判らないため明らかにできない。また、i タイプと ii タイプに時期差を求めず、所用場所や鬼面文としての系統差も考えられよう。よって、この二種は、地

域間で鬼面の范が移動するものの、地域によって外縁を異なる形状に彫り直していることがわかった。これまでの研究では、鬼面文軒丸瓦は四重弧紋軒平瓦と組み合うと考えられてきたが[花谷 1999]、地光寺跡では三重弧紋軒平瓦と組み合うこと〔新庄町 2003〕も指摘されている。このように、鬼面文軒丸瓦は組み合う軒平瓦によって違いをみせている可能性もある。さらなる類例の増加が望まれる。

出土遺跡にまつわる雷伝承

地光寺跡の西には葛城坐火雷神社（笛吹神社）が所在する。『延喜式神名帳』には大和国忍海郡葛木坐火雷神社二座と記載され、式内明神大社に列せられていた。この神社の祭神は火雷大神と天香山命である。火雷神は雷神とされるが、律令時代には大膳職に祀られ、火の神として信仰された。天香山命は、天照大神が天の岩戸にかくれたとき、天香山の土を掘って鏡を作り、竹で笛を作って吹き鳴らした笛吹連の祖神とされている。

雷丘北方遺跡の西側にはかつて氣吹雷響雷吉野大国柄御魂神社が所在していた。飛鳥川の洪水によって境内が流れ、現在は廃社となっている。『延喜式神名帳』には氣吹雷神と響雷神の二座を祀り、名神大社に列せられていた。また、雷丘北方遺跡の南には雷丘があるが、そこは『日本靈異記』によると、少子部柄輕によって雷を捕らえた場所とされる。

出土遺跡の5例の内、川原寺跡と西橘遺跡以外は雷や雷（火）神にまつわる伝承が色濃く残る。大官大寺跡は香具山の南麓にあり、雷丘北方遺跡の東側にあたる。雷丘北方遺跡は雷廢寺の一郭と考えられ、大官大寺と共通した瓦を有することから、高市大寺とみなす意見もある（小澤 2018）。地光寺跡と雷丘北方遺跡、大官大寺跡の近くに「雷」の謂れがある神社があるのは示唆的である。



雷丘北方遺跡



川原寺跡（保井資料）

第10図 飛鳥地域出土の鬼面文軒丸瓦（1：4）



第11図 飛鳥地域における鬼面文軒丸瓦出土地 (1 : 10000)

2. 塚

飛鳥地域出土の塚

飛鳥藤原地域で出土した塚は、総数 33 地点あることが知られる（廣岡 2003）。その内、明日香村内の遺跡では 20 地点あるが、今回新たに西橋遺跡出土塚を加えて 21 例目となる。廣岡によると、飛鳥藤原地域における塚出土遺跡の第一位は寺院であり、寺院の建築資材としての用途が主であるとしつつ、7 世紀中頃は古墳で使用された可能性を無視できないと論じた（廣岡 2003）。明日香村内出土した塚（無紋・有紋）の内、古代寺院では豊浦寺、飛鳥寺、岡寺、川原寺、橘寺、坂田寺、檜隈寺、工房遺跡では飛鳥池遺跡がある。その他の遺跡として、飛鳥寺に近接する東山カワバリ遺跡、飛鳥東垣内遺跡は、飛鳥寺と関連する遺跡とみてよい。そのほか、特筆すべき塚としては、川原寺下層遺跡が挙げられる。この塚の出土場所は、川原寺創建以前の溝 S D 367 下層で、7 世紀前半～中頃に位置付けられている（花谷 2001）。この塚は表裏に同心円文の当て具痕を残すもので、同手法でつくられた塚は河内地域の仏陀寺古墳や細井廃寺などで出土している。この河内地域特有の塚は7 世紀中頃とされ、時期的には川原寺下層遺跡と近い。河内と飛鳥の塚が近似する関係性は不明ながら、古墳と寺院と塚を考えるうえで興味深い。しかしながら、飛鳥藤原地域の終末期古墳で塚を使用した古墳は無い。よって、飛鳥藤原地域では塚を寺院で主に使用したものと考えてよい。

寺の塚・古墳の塚

古墳の塚には須恵質と土師質がある。須恵質の塚には表裏面に同心円文圧痕をよく残している。ナデ消しているものもあるが、その多くはその圧痕を消さずに意図的に残しているとみられる。それは塚を重ねて積み上げるとき、すべり止めの用をなすものと考えられる。古墳に使用される塚は、石室床面に敷くもの、棺台として使用するもの、石室側壁などの構築材として使用するもの、一次墳丘内に葺くものと用途は様々である。焼成方法に関係なく、瓦質によく似た土師質塚も用途は同じと考えてよい。

一方で、橙色や赤褐色を呈した畿内産土師器のような土師質塚も古墳から出土する。その代表例に、大阪府羽曳野市にある鉢伏山西峰古墳と小口山古墳、奈良県香芝市平野 2 号墳がある。これらは榔部床面や埋葬施設床面に敷き、一部は棺台にも使用された。表裏面には布目や板目の圧痕が残るものもあれば、螺旋やジグザグの暗文を施して光沢感をみせるものもある。古墳出土の塚は、その多くが破片で遺跡内での出土点数も少ないため、出土状況から用途が特定できているものはほとんどない。ただ、古墳出土の塚は、焼成具合と製作技法からみて、須恵質塚は須恵器生産工房で、土師質塚は土師器生産工房で製作されたものが供給されたと考えられる。

一方、西橋遺跡出土塚は複雑である。焼成は瓦質であるが、表裏面には同心円文圧痕と力キメ痕跡が明瞭に残されている。製作技法からみて須恵器生産工房で製作された塚と考えられる。谷地形 S X 3041 での出土状況は不明であり、用途はわからない。飛鳥地域で塚を使用した古墳は見当たらないため、寺院での使用のために持ち込まれたものと推測される。しかしながら、隣接する川原寺や橘寺において、同様の手法で作られた塚はみつかっておらず、そもそも両寺で塚を使用した遺構は確認されていない。ただ、川原寺下層遺跡では表裏面に同心円文圧痕が残る塚が出土し、この塚が大阪府仏陀寺古墳など南河内特有の塚と時期的に近接することが指摘された（花谷 2001）。このように、飛鳥地域にも南河内特有の塚が何らかの事情により持ち込まれた可能性がある。南河内特有の塚は、鍋島隆宏氏によって「南河内型同心円文塚」とし

表2 塚の計測比較表

出土遺跡	長辺 (cm)	短辺 (cm)	厚さ (cm)	※ 長辺：短辺	備考
大阪府仏陀寺古墳 (竹内街道資料館蔵)	32.8	24.3	5.5 ~ 6.0	1.35 : 1	両面 同心円文圧痕 片面 布目痕・十字界線あり (田中由紀子氏原蔵)
大阪府仏陀寺古墳 (竹内街道資料館蔵)	33.3	24.6	5.5 ~ 6.0	1.35 : 1	両面 同心円文圧痕 片面 布目痕・十字界線あり (北大路文雄氏原蔵)
奈良県西橋遺跡	38.1	28.7	5.1	1.33 : 1	裏面 同心円文圧痕 表面 カキメ痕跡 十字界線あり

※短辺を1としたときの長辺との比率

て集成され、詳細な研究がなされた（鍋島 2000）。この（鍋島 2000）論文を参照しながら、以下、完形品である大阪府仏陀寺古墳と西橋遺跡の塚の比較検討を行うこととする。

仏陀寺古墳と西橋遺跡の二者を比較してみると、片面の調整技法に差異は認められるものの長短辺にみえる規格はほぼ同じである。また、二者とも面を四等分する十字界線を刻むなど共通した分割方法と製作技法を見ることができる。この二者が同一の生産工房で製作されたとは言えないまでも、共通した技術基盤を有した集団によって製作されたものと考えられる。こうした集団が、それぞれの依頼・発注先のために製作し、使用先である寺院や古墳に供給されていったものと推測すれば、川原寺下層遺跡には両面に同心円文圧痕を残す塚、一方、西橋遺跡には片面に同心円文圧痕を残す塚のように分別して供給されたと考えることもできる。しかし、『西橋報告書』によると、西橋遺跡は立地と遺物から川原寺と橋寺の造営・整備に関連する遺跡と総括しており、塚を西橋遺跡で使用するために供給されたとは考えにくい。西橋遺跡の性格を考慮して踏み込んで推測するならば、西橋遺跡は川原寺・橋寺に関連する寺院付属の物流拠点であったと考えられないだろうか。その根拠として、西橋遺跡の北側に接して古道（「川原橋古道」）が東西に延びていること（相原 1994）のほかに、西橋遺跡出土鬼面文軒丸瓦と同文のものが川原寺跡（保井資料）でも確認されていることが挙げられる。特殊な軒丸瓦と塚が川原寺・橋寺に関連する西橋遺跡で出土した意味を考えると、現段階では、西橋遺跡は寺院付属の物流拠点と考えておきたい。

塚の実用的な性格上、当初の使用状況ではなく最終的に転用された状況で検出されることが多い。そのため、当初の用途に応じた形態を残していても、転用状況からでは当初の用途を明らかにし得ない。今後は、古代飛鳥地域に限らず、遺構として当初の使用状況がわかる事例が検出されることに期待したい。

第5章 まとめにかえて

今回の補遺編では、瓦塚を中心に報告した。軒丸瓦では類例の少ない鬼面文軒丸瓦に新例を加えることができた。鬼面文軒丸瓦は鬼面文と外区外縁において二種に分けることができ、その二種には葛城地域と飛鳥地域という地域性を読み取ることができるかもしれない。一方、塚

については、南河内特有の壇と共に共通した技術基盤の下で製作されたことが明らかとなった。しかし、西橋遺跡出土壇は7世紀後半頃に位置付けられ、南河内特有の壇より時期的に後出する。南河内と飛鳥の壇にみられる製作技法上の差異が工人集団によるものかそれとも時期的なものか、今後も検討を要する。今回取り上げた二つの瓦壇は、類例の増加によって明らかにできるだろう。

【註】

- 註1：刊行後に確認できた西橋遺跡出土遺物には土器類、瓦類、木製品、鉄製品がある。すべて平成3・4年度調査時の遺物である。当時、内容とその出土量の多さから整理や調査研究に時間を要し、さらに、村内発掘で出土した遺物の収蔵場所を確保するため、村内各所に分散して収蔵・管理していたことも要因のひとつであろう。また、発掘当時に外部に分析や整理を依頼していたが、その経緯を記した書類も確認できていない。今後、西橋遺跡出土遺物が再発見された時には、補遺編として隨時報告する予定である。
- 註2：現在、西橋遺跡で出土した瓦類は、木箱5箱分確認できた。大半が丸瓦と平瓦の破片であり、未選別の状態であった。今回報告する瓦壇は先の木箱とは別のコンテナに保管されていた。
- 註3：遺物に「橋4区 東 青灰色粘質土 920924」と注記が残る。調査日誌にはこの軒丸瓦についての記述はない。『西橋報告書』では、東地区第4調査区東半に広がる青灰色粘質土について、黄褐色山土（整地土）よりも上層にあり、この層位から出土した土器は奈良時代に位置付けている。
- 註4：『明日香村遺跡調査概層 平成4年度』には東地区第4調査区（E4区）で川原寺式軒丸瓦を1点確認したとの記述がある。今回確認したコンテナには、注記未記入の川原寺式軒丸瓦と他の遺跡から出土した川原寺式軒丸瓦が数点混在しており、どの軒丸瓦が西橋遺跡出土であるか特定できなかった。

【参考・引用文献】

- 相原嘉之 1994 「第3章 北調査区（大辻地区）検出SD02の検討」『西橋遺跡発掘調査概報－村道川原立場線改良工事に伴う発掘調査－』明日香村教育委員会
- 相原嘉之 2019 「西橋遺跡出土土器」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会
- 岩戸晶子 2015 「17 軒丸瓦・軒平瓦 地光寺跡出土」『白鳳－花開く仏教美術－』奈良国立博物館
- 小澤毅 2018 『古代宮都と関連遺跡の研究』吉川弘文館
- 明日香村教育委員会 2024 『西橋遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 18
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2010 『ふたつの飛鳥の終末期古墳 河内飛鳥と大和飛鳥』
- 河内一浩 2017 「安威地域の壇について」『茨木市立文化財資料館館報 第2号』茨木市立文化財資料館
- 新庄町歴史民俗資料館 2003 『平成15年度春季企画展 忍海探訪』
- 高槻市立今城塚古代歴史館 2012 『阿武山古墳と牽牛子塚－飛鳥を生きた貴人たち－』
- 鍋島隆宏 2000 「仏陀寺古墳出土の壇について」『太子町立竹内街道歴史資料館 館報』第6号、太子町立竹内街道歴史資料館
- 花谷浩 1999 「川原寺出土重弧紋軒平瓦細見」『奈良国立文化財研究所年報 1999-I』奈良国立文化財研究所
- 花谷浩 2001 「土器と壇・瓦の話」『奈良文化財研究所紀要 2001』奈良文化財研究所
- 花谷浩 2009 「飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究III－川原寺式軒瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所

菱田哲郎 2017 「東奈良遺跡出土の壇」『茨木市立文化財資料館館報 第2号』茨木市立文化財資料館

平田政彦 2021 「河内錦織廃寺の瓦壇について－大阪教育大学歴史学研究室所蔵の考古資料（四）－」『歴史研究 59号』大阪教育大学歴史学研究室

廣岡孝信 2003 「飛鳥・藤原地域の壇の使用」『古代近畿と物流の考古学』学生社

松村恵司 2005 「飛鳥の古和銅錢」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会

松村恵司 2007 「和同開珎をめぐる諸問題」『和同開珎をめぐる諸問題（一）－平成17年度研究集会報告書－』『科学研究費補助金基盤研究（B）（2）『富本錢と和同開珎の系譜をめぐる比較研究』

保井芳太郎 1932 『大和上代寺院志』大和史學會

【挿図出典】

第1図：『西橋報告書』 第2図：相原 2019 より引用。一部改変。 第3図：『西橋報告書』

第4図：『西橋報告書』 第5図：『西橋報告書』 第6～9図：筆者作成

第10図：左図 花谷 2009 より転載、右図 保井 1932 より転載

第11図：筆者作成

表1・2：筆者作成



鬼面文軒丸瓦



図1 裏



図1 表

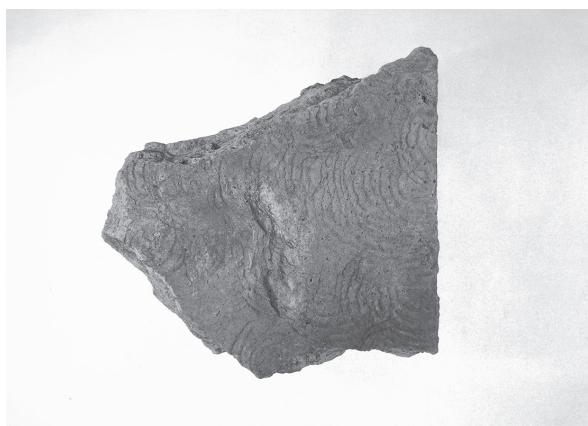


図2 裏

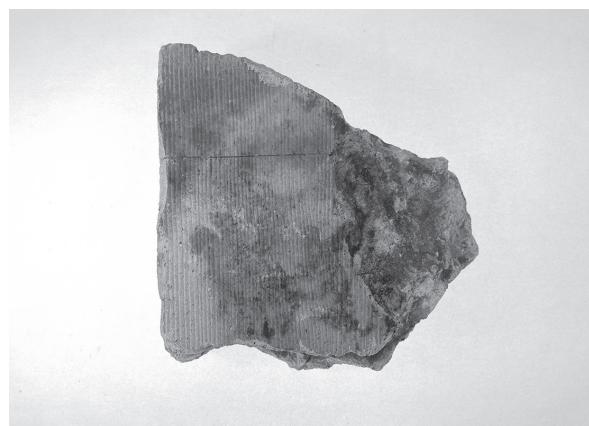
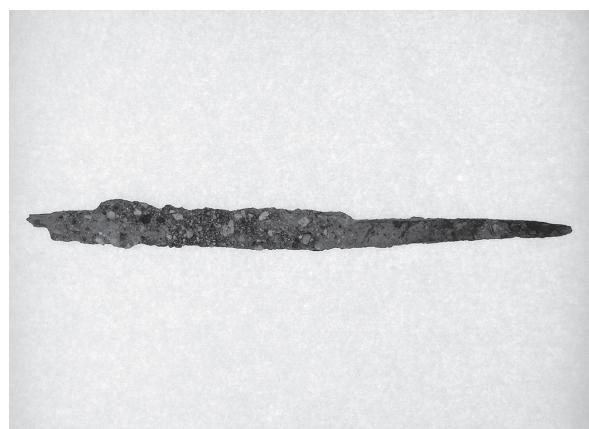


図2 表



図3 表



鉄刀子